

---

# F B I から来た女: 番外編 ~ 6 5 0 0 万年前の亡靈の別ルート

ユーリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FBIから来た女・番外編／6500万年前の亡靈の別ルート

### 【NZコード】

N4940E

### 【作者名】

コーリ

### 【あらすじ】

このお話は、『FBIから来た女・2／深緑・緑の章』のファイル154～167に収録されている『6500万年前の亡靈』の別ルートのお話です。本編とは結末が全くちがいます。

## (前書き)

このお話は、『6500万年前の亡靈』の別ルートのアイデアをある方から提供してもらい、編集した物です。  
本編とは結末がちがいますが、楽しんでいただけたら幸いです。  
では、本編へどうぞ。

「コナン、それにしても……轟蔵さんはどうして恐竜をあんな風にしてまで売り出そうとしてるんだ？」

コナンは気にかかっていた事を口に出すと隣で同じく思案げに眉を寄せる哀に意見を求めた。

哀「そんな事は私にもわからないわ。でも何かイヤな予感がするわね……このままでは済まされないような……うまく言葉で言えなけれど……とてつもない事件に結びついている気がして仕方ないのよ……！」

コナンの問い掛けにそう応えた哀は言い知れぬ不安に胸が押しつけられ窮屈そうに事の行末に思いを廻らせる。

その時である。

「コナン」と哀は人目を憚るよう<sup>はばか</sup>に周囲を見渡し足速に歩く轟蔵を目にした。

その様子に不信感を抱いたコナンが怪訝<sup>けげん</sup>そうに言葉を洩らす。

「コナン、あんなに拳動が怪しいと自分の罪を公表してんのと一緒にだな……それくらいの事にも気付かないのか……？」

するとコナンの考えを補足するように哀の言葉が確信じみた答えを弾き出した。

哀「犯罪者なんてそんなモノよ？自分に疚<sup>やま</sup>しい事がある人なんてみんな一緒によ……常に後ろめたく思つてはいるから、無意識に周りを必要以上に意識してしまうの。それがコナン君……あなたのようない人の目に触れるとも知らずにね……？」

「コナン、ああそうだな……確かにそれは言えてるかもな！轟蔵さんを見てると、何だか逆に氣の毒に思うよ……言い換えれば、あの人人が係わっている事の大きさが証明されてるようなもんだからな……」

「コナンはそう言つて轟蔵の動向に目を光らせ、いつでも何等かの対

応が出来る様に身を構えた。

哀もコナンの背中に密着する様にして轟蔵の行方に視線を廻らせていたが、ふとその背中の広さに感銘を受け、轟蔵の事からコナンの事へその気持ちは移つてしまつていた。

哀「（コナン君の背中つてこんなに大きかつたのね・・・）」の背中がいつも私を助けてくれた・・・今でも時々信じられない事があるのよ？どうしてあなたが私を選んでくれたのかつてね・・・」

哀は本来なら場違いな考えに自嘲し、轟蔵へと意識を集中しようと自分に言い聞かせたのだが・・・

コナンは先程から背中に感じる哀の気配に今更ながら緊張していた。哀とつき合つようになつてから常に間近に哀を感じてはいたが、これほどまでに身体を密着させた事が無く初めての経験に羞恥心を隠せずにいたのである。

ましてや背中に感じる何か柔らかな感触にコナンの意識は轟蔵ビックリでは無くなつていたのである。

コナン「なあ・・・哀？その・・・も少し離れてくんねーかな・・・」

「コナンが困惑顔で哀に告げると、彼女は目を見開いて俯き気味に言葉を返す。

哀「私と密着するの・・・嫌なのね・・・コナン君、私の事が嫌いになつたんだ・・・」

見る見る哀の顔に陰りが注し、語尾は消え入りそうに委んでいった。コナンは哀が自分の言葉に大きな勘違いをして居ると気づき、弁解する様に哀に照れながら言葉を返す。

コナン「違うんだ哀・・・その・・・恥ずかしいんだ。背中にオメーの・・・胸が当たつてな・・・」

顔を真つ紅にして俯くコナンに哀も同じ様にいやそれ以上に頬を紅く染め上げ、コナンの背中を力いっぴい<sup>つね</sup>抓つた。

哀「バカ・・・意識しすぎよ・・・!!今はそんな事考えてる時じやないでしょ・・・轟蔵さんを見失つてしまつわ？」

哀の言葉に気を取り直したコナンは再び轟蔵に意識を集中し、哀を伴いその後を追つた。

するとしばらくして轟蔵が辿り着いたのは一軒の廃屋で、彼はやはり警戒する様に周りを確認した後にその廃屋へと姿を隠し入れた。コナンと哀は外でしばらく様子をうかがっていたが、なかなか出来ない轟蔵に痺れを切らし、恐る恐る様子を見るため自分達も中に入る事にした。

音を起てない様慎重に足を踏み入れると、中では轟蔵と何やら緑色の上下に身を包んだ男が取引をしている真っ最中だった。

コナン「うわっ！何だあの男の趣味……？オレだつたら恥ずかしくてあんな恰好できないぜ？」

コナンが正直な気持ちを呟くと、哀も同調する様に応える。

哀「そうね……コナン君には『白』が似合つかもね……どこかの『泥棒さん』みたいに！」

哀は冷やかし半分でコナンにそう言つて悪戯っぽく微笑んだかと思うとすぐに真顔に戻り『緑の男』に対する疑念を称えた。

哀「あの独特なファッショングセンス……気になるわね……まるで彼らみたいだと思わない？」

哀の質問の意図を理解したのか、コナンは思わず絶句してしまった。コナン「……じゃあもしかしてヤツは……『緑の組織』の仲間なのかな！？」

突然目の当たりにした事実にコナンは動搖を隠す事ができない。もし本当にそうなのであれば、一気にその存在に近づく事ができるチャンスが今まさに目の前に突きつけられたのである。

否応なしに心臓は高鳴つてしまつ。

その事で2人の警戒心が薄らいでしまつたその時、背後から忍び寄る影にコナンと哀は気づく事ができなかつた。

影は風のよつた疾<sup>はや</sup>さで2人に迫ると、瞬く間にコナンと哀を捕まえた。

そして暴れる2人を腕に抱え、取引相手の轟藏に詰めかけた。

「おい富山さんよお！？アンタつけられてたみてえだぞ？困るんだよ・・・・・こんな事でオレ達の存在が明るみに出ちまつたらよお・・・・・！」

コナンと哀を捕まえた内の1人が轟藏に吐き捨てる、顔面蒼白になつた轟藏は額の汗を拭つて慌てて弁解の言葉を返した。

轟藏「申し訳ございません・・・まさかこんなガキ共に気づかれるとは・・・後始末は私の方で何とか致しますから・・・今回の件はどうか不問に付して頂きたい・・・」

轟藏が縋る様に男にそう言つてコナンと哀を苦虫を噛みつぶしたような顔で睨みつけると、2人はその顔を見て背筋が凍る様な感覚を覚えて、身体を縮こませてしまった。

「まあいい・・・取引自体は終わつたんだ・・・後はアンタがしつかりこのガキ共を始末すれば一件落着なんだからな・・・・・！」

どうもこの男は数人いる中でもリーダー格らしく一切を取り仕切つ

ている様子で、轟藏の態度からもそれは容易に推測出来ていた。

『富山轟藏』と言えば世間でも名の通つた財界人である。

普段は踏ん反り返つて居るであろうその男が、有無を言わされないほどに従う側に立たされてしまつてゐるのだ。

その事がこの男の『組織』での身分の高さを証明してゐたのだ。

「じゃあオレ達は帰るぜ！？今後何か妙な動きをしやがつたら・・・解つてるんだろーな！？」

『組織』の連中はそう言つとまた風のよつたその場から立ち去つてしまつた。

その後コナンと哀は逃げる事も叶わず、轟藏の睨みをまともに受け事となつた。

なぜなら先程『組織』のリーダー格らしき男に全身をロープで縛り上げられ、身動き一つとれなくなつてゐたからだ。

コナンと哀は瞳を見つめあいながら考えた。

自分達の置かれた状況から脱するにはどうすれば善いのかを。だが現時点では何も思いつかず、時間だけが空しく過ぎていくのみであった。

コナン「（クッソー・・・何とかなんねーかな・・・）のまま殺されるのを待つしかねーのかよ・・・！？犯罪を目の前にしてゐるのに指をくわえて見ている事しかできないのか・・・！？コナン考えろ・・・考えるコナン・・・」

コナンがそんな風に考えて歯軋りをしていると、哀が心配そうに顔を覗き込んできた。

コナンは哀を見つめるとその瞳に恐怖心を見取ったため、何とか気分を和らげようと考へたのだが、思いつく事といったらどうにでも先程の哀の感触のみであった。

コナン「ところで哀・・・？」

口の自由は奪われていなかつたのでコナンは思い切つてその話題に触れてみる事にした。

何でも良いから今哀を恐怖から救い出すにまつてつけの事だと確信し、覚悟の為に一つ咳ばらいをする。

コナン「オメー案外胸あんだな・・・」

哀「・・・ハア！？」

哀の頬が一瞬で紅く染まつたかと思つと急に怒り出してしまつた。

哀「コナン君！こんな時に何考へてるのよ！–今はこの状況からどうやつて助かるかを考えるのが最優先だつて・・・あなただつてわかつてるぢやない・・・」

瞳を潤ませて抗議する哀に、コナンは慌てて弁解しその理由を説明した。

コナン「わりい哀・・・オメーが怖そうにしてつから落ち着かせようと思つて・・・でも少しは気が紛れたんぢやねーか？」

コナンにそう言わると哀は確かに自分の中から恐怖心が消えていふ事に気づいたのか不思議そうにコナンを見つめた。

しかしこである。

哀「……だからってあの話題はないわ……私だって一応女の子なのよ？そんな事言わると恥ずかしいんだから……」  
はにかむ様に俯く哀を見たコナンは、高鳴る鼓動を抑えるのが必死だった。

その可愛らしさに感激し、どうしようもなく抱きしめたい衝動に駆られてしまったのだ。

一方の哀もコナンの気持ちを察したのか 表情を和らげると照れながらコナンに言葉を返した。

哀「助かつたら私をその……コナン君の好きにしていいわ……あ……でも1つだけね？」

するとコナンの瞳は鋭く光り自信家特有の覚り切った表情を称えていた。

哀のたつた一言がコナンに力を吹き込んだのである。

この時コナンの心の奥にはある『野望』が芽生えていた。

敢えて今は触れない事にしておくが……

愛の力とはまことに不思議なモノである。

哀はコナンの先程までとは打って変わった『やる気』に呆れた様に乾いた笑いを零し、輝く瞳を見遣ると今度はげんなりして溜め息を吐いた。

哀「ねえコナン君……あなた一体どんな事を望むつもりでいるのかしら……？さつきから異様な執念を感じるんだけど？」

堪らず零れた哀の言葉にコナンは一瞬顔を引き攣らせるが、次にはポーカーフェイスをながらで巧に誤魔化しを謀つていた。

コナン「イヤ……何もこんな時に言つ事でもないし……ホラ……助かつた後でのお楽しみに取つておいた方が……」

この時コナンは自分的にはうまく『まかせたとなぜだか思つていたのだが、実際には明らかに拳動がおかしく哀の目を誤魔化す事など無理なのであつた。

哀「（怪しいわね……）コナン君は明らかにウソをついているわ……」

・ そつまでして私に何を望むのかしら？」

哀は疑問に思い暫くコナンの顔をじつそり覗いてみた。

すると一瞬コナンの口許が緩み切つて、薄ら笑いを浮かべたのである。

哀「（ま・・・まさかコナン君・・・ー？・・・ダメよ！私達心は大人だけど身体は小学生なのよ？無理よ・・・そんな事できっこないわ！ー）」

哀は一人で暴走し顔を真っ紅にしたのだが、まさかコナンを問い合わせる訳にもいかず、悶々と妄想に耽りその甘美な世界に身体を震わせた。

その時である。

轟蔵がコナン達の方に歩いてきたかと思うと、突然苦しみ出して倒れ込んだのだ。

コナンが轟蔵へと身体を転がせて行くと、轟蔵の口許から微かにアーモンド臭が漂つてくる。

コナン「青酸中毒の様だな・・・でもどうして・・・ー？」

コナンは考えつくあらゆる可能性を挙げた。

1つ目は轟蔵本人が自らの意思で青酸カリを摂取した可能性・・・  
2つ目は他の誰かの意思によつて何らかの毒物を混入された可能性・・・

そして3つ目は偶然そこにあつた毒薬に触れてしまい、無意識に体内に取り込んでしまつた可能性であるが・・・

3つ目の可能性に関しては状況からして無理があつた。

こんな廃屋に偶然にも青酸カリなどという物が存在する訳がないのである。

そして1つ目の可能性についてだが、轟蔵の様な人間は他人を死に追いやる事はしても自分の命を自らの意思で断つような事はしないのではないかと思われ、残る可能性は2つ目の他殺説へと自然に絞り込まれる。

そしてコナンは重要な事に気づいてしまつた。

青酸カリは速攻性の高い毒物なのである。

つまり苦しみだす直前まで轟蔵はまだ青酸カリを摂取していなかつたという事になる。

そして他殺だとするとその時轟蔵の近くには誰かが居なくてはならない訳だが、実際にはそんな人物は居なかつたのだ。

『緑の組織』の連中らしき男達は随分前に引き払つていつたし、こんな廃屋にわざわざ人を殺める為に侵入する輩がいるとは考え難い。そして自分や哀に至つては動機も無ければ轟蔵に近づく事さえできなかつたため、犯行は不可能なのだ。

とすると、間接的に轟蔵に青酸カリを飲ませた人間がいる事になる。だが一体どうやってそれを可能にしたのかとコナンが轟蔵を隈なく監察すると、その手にはドリンクの缶が握られていたのだった。

コナン「そうか！この缶に毒物を混入しておけば・・・」

コナンはそう推理して、何とか犯人を見つけだしたいという『探偵の性』に駆られてしまつていた。

そして幸か不幸か自分達を監禁していた轟蔵が死んでしまつたため、この場から逃げる事も可能になつたのである。

コナン「哀・・・轟蔵さんは多分悪い人なんだろう・・・でも・・・だからと言つて殺されても仕方ないって事は無いよな・・・？」

哀はコナンの言葉尻に込められた怒りに気づき、同調の意を瞳にあらわした。

哀「そうね・・・恐らく『組織』に脅されて悪事に身を染めてしまつたつてところでしょうね・・・こういう人つて保身のあまり自分から進んで悪事に手を出すなんて事しないわ・・・」

哀にしても簡単にこの犯行を見逃す訳にもいかず、悪を憎むコナンの気持ちも痛いほどわかつっていたのである。

哀「とりあえずロープを解かなければね！コナン君・・・起き上がれる？」

哀はそう言つてコナンを起き上がらせると、ロープの縛り目を解こうと口に含んだ。

が簡単には解けるハズもなく苦しい体制に疲れた哀は次第に鼻息も荒くなり、時折口から抜ける溜め息には妙な艶っぽさが入り交じつてそれがコナンを刺激する。

コナン「哀・・・色っぽいな」

いきなりそんな事を言われた哀はビックリもしたが、それ以上に恥ずかしくなり、拗ねた様にコナンのロープから口を外した。

哀「コナン君、一言多いわ！恥ずかしくて集中出来ないじゃない・・・・もう知らないんだから・・・！」

コナンは哀に平謝りして続ける様にお願いしたのだが、哀は頑なに拒否したために今度はコナンが哀のロープを解くために哀の後ろに身体を入れ換えた。

そしてコナンも哀同様に手間取つてしまい、これも同様にいつしか吐息を洩らす羽目になつてしまつっていた。

哀がそれをからかうとコナンは悪戯心が芽生え、後ろから哀の耳元に息を吹き掛けその反応を楽しんだ。

そうこうしているうちにエスカレートしてしまいお互い気分も高まつた頃、囚われの身である事をすっかり忘れてしまつたのか、どちらからともなく向かい合い瞳を閉じてその瞬間を手に入れようとしたその刹那・・・

歩美「コナン君！哀ちゃん！！ラブラブすぎだよ～！！！」

その叫びにコナンと哀が顔を向けると、そこに立つていたのは・・・

コナン・哀「歩美ちゃん！！？」

そう呼ばれた彼女が頬を膨らませて軽蔑の眼差しで睨んでいた・・・

「コナン「『めん』めん歩美ちゃん！！」

コナンは何度もそう言つて謝つたが、当の本人は全く聞く耳を持たずといった感じで未だにコナンに軽蔑の眼差しを贈つたまま膨れつ面をしていた。

取りつく島がないコナンは哀に救いの手を求めたのだが、彼女も歩美の前では恥ずかしかつたのか、逃げる様に恐竜博の会場へと走つて行つてしまつ。

コナン「あ・・・哀・・・」

コナンに呼び止められた哀はホントは振り向いて応えてあげたかつたのだが、先程の余韻が残つていたためどうしても意識してしまつのが恥ずかしくて顔を合わせられなかつたのだ。

哀「（コナン君のバカ！あんな場所であんな事するなんて・・・歩美ちゃんが助けに来なかつたらあなたどうしてたの！？・・・いくらなんでもあんな場所でつてのは勘弁だわ・・・）」

まさか哀がこんな事を考えているとは思いもせず、会場で歩美達の帰りを待つていたユリ達は帰つて来た哀の顔が紅い事に気づき、力ぜをひいて熱でもあるのではないかと本氣で心配したものである。だが、後から戻つて来た歩美に真相を聞くと、全員が顔を真っ紅にして「コナンを質問攻めにしたのだつた。

刃「コナン君？あなた欲求不満なんじやないの？」

ユリ「シェリーに悪い事したら許さないわよ？新一君！？」

とユリに釘を刺されるし、

風月「大人つて何でそんなにエッチなのかしら！？あなたはちがうつて思つてたのに・・・幻滅だわ・・・」

と風月には辛辣なコメントを頂く始末・・・

元太や光彦・たくまやマリアに至つては話についていけないのか、各々がてんで見当外れな意見を述べていた。

特に元太といつたら、

元太「他のヤツには黙つとくからうな重奢れよ？」

などと食い氣に走る始末で、周りのみんなの目が点になつてしまつほどだつたのである。

そんな状況から逃げ出したかつたコナンは、強引に話を轟蔵の件へと移行した。

初めは方々から批難の声が上がったが、話が進むに連れ次第に空氣は緊迫感を帯びてくる。

そして轟蔵が突然苦しみ出して倒れてしまつたという頃には、全員の顔に正義の光が灯つていた。

刃「ねえ・・・それつて・・・」

刃がいち早く疑問を言葉にすると、

風月「おそらくそうだと思つわ・・・ペントコラムアッシュの一つ『縁の組織』に間違いないでしょ? うね・・・」

そう応えたのは風月だった。

マリア「ところでコナン君・・・話を聞く限りやと轟蔵さんを殺したんは『縁の組織』やないと思つんやけど・・・コナン君はどう思てんの?」

コナンはマリアの鋭い意見にうなずくと、自分もそう思つてゐる事を打ち明けた。

コナン「うん・・・確かにマリアちゃんの言つ通り、轟蔵さんと取引をしていたのは『組織』の連中だと思つけど殺しの件は別の犯人がいると思うよ? それが誰なのかはわからないけど・・・オレの考えでは今回の恐竜博の関係者の中にその犯人がいるんだと思つてるんだ・・・」

するとコナンのこの意見に同調したのはコリであった。

彼女も『組織』特有の殺し方を知つてゐるため、あんな簡単なトリックを用いる犯人が『組織』である可能性を否定する事に異議を示せなかつたのだ。

コリ「私も同感ね・・・『ペントコラムアッシュ』の犯行であるなら・・・青酸カリなんか使わずに『APT-X4869』を使つた方が証拠も残さなくて済むハズだし?」

風月「そもそも今轟蔵さんを殺してしまつメロットが『ペントコラムアッシュ』にあるのかしら・・・?」

風月に至つては事細かに分析し『組織犯行説』をほぼ完全に否定してしまつたのである。

元太・光彦・歩美「じゃあ一体誰が！－！」

元太・光彦・歩美には少し難しい話だったのか、話についていく事が出来ずに結論を催促するようにコナン達の顔を覗き込んできた。たくま「おいおい……そんなに急かしたらコナン君達困っちゃうだろ？オレにだってわからない事いっぱいあるけど温和しく聞いてるんだ……オメーラも黙つて座つてろつて！」

たくまに寝められた3人は多少不満げではあったが素直に言う事を聞き初めは温和しく話に聞き入っていたのだが、次第に集中力が薄れたのかよそ見をする者・欠伸を噛み碎く者、また本当に眠ってしまった者とに分かれコナン達の冷笑を買つてしまつたのであった。マリア「……で？ 哀ちゃんは誰が怪しいと思てんの？」

哀「え……」

マリアにいきなり話を振られた哀は答えに詰まつてしまつ。何故ならコナンの事で上の空だつたため、コリ達の話をほとんど聞いていなかつたのである。

その様子に気づいたコナンは何とか哀を助けたいと考え、ある事を思いついたのかトイレに行く振りをして会場の物陰に身を潜めた。コナンがトイレに行くのを見送つたマリアが改めて哀に質問すると・

哀「まだハツキリとは解らないわ？ 詳しく調べてみる必要があるんじゃないかしら……？」

哀が応えたのだと思われたが、当の哀は自分の耳を疑つたのである。自分がしゃべつていいハズはないのに聞こえてくるのは確かに自分の声なのだ。

しかもその声は自分の肩口から聞こえてくるので周りからすれば哀が話しているとしか思えず、疑問に感じる者はいなかつた。

哀「（さてはコナン君……私にこの事件を解かせようとしてるのね？でもどうして？あなたが解決した方がカツコイイのに……あ・・・眠つた振りをした方が良いのかしら……？）

最後の文句は余計だつたが、哀はコナンの行動には全幅の信頼をお

いていたのでそのまま声に合わせて口を動かす事にした。

哀「啓作さん……ちょっとこっちに来てくれないかしら？」

突然哀に呼ばれた啓作はいぶかしげに探偵団に視線を移すと肩をす

くめて歩き出した。

そして哀の傍らに寄ると、今度は不思議そうにその顔を覗き込んで哀と目が合つてしまいショックを受けてしまった。

哀に視線を逸らされてしまつたのである。

密かに哀に好意を寄せていた啓作は立ち直れない位ドン底に叩き落とされ、直ぐにでもこの場からいなくなりたいと思い意氣消沈して哀に背中を向けてしまう。

それを見たコナンはなんとか立ち直らせようと考え、本人の承諾も得ずとんでもない事を言い放つ。

哀「協力してくれたら……手をつないで『データ』してあげようから……」

この提案に啓作は飛び上がるほど喜び、探偵団は驚嘆の声をあげた。そして哀は……

哀「（ちょっと……コナン君！？私を生贊にするつもり……！？）」  
何かあつたらどうするのよ！？」

と内心穏やかでは居られなくなつてしまつた。

啓作「な、何でも言つてくれ……！？」  
作・・・命を賭けてつ・・・！」

哀「あ、あの！命は賭けなくていいから……今から私が言う事を調べてください」！」

コナンもここまでとは予想していなかつたため、慌てて用件を言って冷や汗を拭つたのであつた。

コナン「（後で哀に殺されるな……しばらく口聞いてくんねえだろうな……）」

と肩を落として溜め息を吐いていると急にもよおしてしまつた。その時である。

啓作が用件を聞くために警察手帳を取り出したのだ。

「ナンとしては今すぐにでもトイレに駆けつけたかったので啓作に話し込まれる訳にはいかなかつたのだが……」  
啓作「……で、用件というのは……？」  
と啓作が話を始めてしまい、コナンは動くに動けなくなつてしまつた。

「コナン」「（マ・・・マジ・・・・！？）」

結局啓作の事情聴取は延々小1時間続き、その間哀の代弁をしていたコナンは何度も哀の声で艶かしい吐息を洩らし、周囲（特に啓作）をドギマギさせてしまつたのであつた。

そして哀といえば……

哀「（「ナン君・・・・1回殺す！…！）」

顔を真っ紅に染め上げてそう決心していたのである。

そんなこんなでその後1時間が過ぎ、啓作の（正確には警察の）捜査によつていくつかのデータが取り揃えられた。

そしてコナンが目を通すとまた幾つかの興味深い情報が記されていたのである。

「コナン」「なるほどな！…・・・て事は・・・犯人はあの人だ・・・！」

コナンは両の頬の真っ赤な『紅葉』をさすりながら犯人を確信したかのようにその瞳を光らせた。

そして膨れつ面で冷たい視線を贈つてくる哀に耳打ちをする。

実はコナン、さつき戻つて来た時に哀の強烈なビンタをくらつたのだ。

哀「今度は大丈夫なんでしょうかね？次もあんな恥ずかしい事されたらビンタだけじゃ済まされないわよ！？」

哀がこう言つて若干の抵抗を見せると、コナンはさつきの事で身に染みていたのか必死に説得して済々哀を納得させる事に成功した。

哀「じゃあ啓作さん・・・・関係者を中に入れてください。」

「コナン」哀がそう言つて関係者を招き入れると各々からざわめきが起つるが哀はそれを抑える様に果たして声を上げる。

哀「皆さんお静かに！！実は3時間ほど前、『ゴウゾウグループ総裁・富山轟蔵氏』が何者かによつて殺害されました！」

この切り口上に場内のざわめきは激しさを増し、口々に自分の潔白を訴える者、また中傷的な意見を述べる者とで収拾がつかなくなつてしまつたのである。

が、哀は一向にかまわないといった感じで事件の真相へとすべてを誘う。

哀「轟蔵氏は青酸カリの服用に依る薬殺によつてこの世から『抹殺』されました。そして轟蔵氏を『抹殺』した犯人はこの中にいます。その犯人とは・・・浦沢敏江さん！貴女です！！」

これには関係者一同が驚愕の声を挙げたが、当の本人は飽くまでも白を切るつもりかヒステリックな高笑いを上げていた。

敏江「私が総裁を？何を根拠にそんな戯言が言えるのかしらねえ・・・お嬢ちゃん？」

それとも無視する様に哀の言葉は続く。

哀「根拠ならあるわ？貴女の息子さん・・・以前ゴウゾウグループで働いていたそうね？でも10年前に『不慮の事故』で亡くなつてゐる・・・調べたら面白い事がわかつたわ。その事故にはもう1人犠牲者がいて、その人は息子さんの奥さんだった・・・名前は『新庄光莉』。光樹君のお母さん。息子さんの名前は『新庄拓哉』。あなたと姓が違うのは息子さんが小さい頃離婚して父方に引き取られたからよ！息子さんの死に疑問を持つたあなたは、ゴウゾウグループの秘書になつて息子さんの仇を討ちたかったのね・・・あなたはゴウゾウグループで働きながら轟蔵氏殺害を目論んでいたけどなかなかチャンスに恵まれなかつた。でも今回この恐竜博でようやくその機会を手に入れたのよ！光樹君の『会場荒らし』を利用する事にしたあなたは、光樹君に罪をなすりつけて自分を容疑者から外そうとしたのよ！轟蔵氏を怨んでいる光樹君なら彼を殺す動機がある・・・」

「そう考えたんでしょうね？そしてあなたは犯行に及んだ・・・ゴウゾウグループの権力を量に闇ルートで青酸カリを手に入れたあな

たは、それを轟蔵氏に飲ませて見事に毒殺したのよ……」

哀がここまで一気に畳み掛けると、敏江の高笑いがピタリと止んで引き攣つた様に顔を歪ませた。

敏江「なかなか面白い推理ねお嬢ちゃん？でも私にはアリバイがあるのよ？総裁が死んだとされる時間には、私は八千草博士と商談していたのよ？その私がどうやって総裁に毒を飲ませられるのよ！？大体総裁は缶ジュースを飲んで死んだんでしょう？それなら私じゃなくて可能だわ？それでも私がやつたと言うなら証拠を見せてちょうだい……」

敏江の開き直りに改めて確信を得た哀がまるで『トドメを刺す』かの様に最後の真実を突き付ける。

哀「あら？あなたどうして轟蔵氏が缶ジュースを飲んだ事を知ってるの？犯人しか知り得ない事を何故かあなたは知っている……それはつまりあなたが犯人だと認めた証じやないの？ちなみに、ジュースから検出された青酸カリの濃度は致死量には至らなかつたそうよ？これが何を意味するのか……言つてあげましょうか？」

敏江「もう良いわ……浅はかなカムフラージュをしたのがいけなかつたのね……アリバイを捨ててでも直接この手で殺しておくべきだつたわ……！」

敏江はうなだれてそう言つと、遠い目をして事の真相を語り始める。

敏江「あなたの言う通り私が総裁を殺したの……富山は事故に見せ掛けた息子を……拓哉を殺した……あの子が死んだ時には知らなかつたのだけど、1年位経つてからある事がきっかけでその事を知つたわ。私は込み上げる怒りに……悪魔に魂を売り飛ばしてしまつたの……たつた1人の息子を光莉さん共々殺されて私にはもう何も失くなつてしまつたから……生きてさえいればいつか必ず逢える……そう思つてそれだけを支えに生きてきたのに……あの男はそんな私の夢を土足で踏み鳴らしたのよ……だから殺す事にしたの……殺した事に後悔はしないわ？アイツが生きてると拓哉はいつまで経つても浮かばれない……それがやつと成仏

出来るんだもの・・・ざまあみうだわ・・・！」

敏江は心の濺<sup>おひ</sup>を涙で洗い流すと啓作と紅子に伴われて警察へと連行されていった・・・

パトカーに乗り込む前に八千草博士に淋しそうに微笑むと、光樹に向かつてもう1つの真実を説き明かした。

敏江「八千草博士がお母さんの研究を横取りしたのなんてウソよ？博士は富山からそれを護る為に匿そうとしただけ・・・それを無理矢理富山に奪われてしまったのよ・・・だから博士は何も悪くないの・・・私が聞いた話では博士はあなたのお母さんを心から愛していたそうよ？そんな人がお母さんの研究を奪つたりする訳ないじゃない。すぐには言わないけど博士を許してあげなさい？あなたにはそれが出来るわ！だつて私の・・・孫なんだから・・・！」

そう言って泣き崩れる敏江を乗せてパトカーが走り去ると博士に寄り添う光樹の姿があり顔をしわくちゃにして涙を零す博士の嗚咽<sup>おえつ</sup>が天まで届いていた。

そしてそれを見つめる探偵団の田口も、同じ様に熱いものが込み上げていた・・・

その夜・・・

コナン「哀しい事件だつたよな・・・」

哀「そうね・・・人間どこに闇が潜んでいるか解らないわね？もしかしたらコナン君や私にもそんな闇があるのかも知れないわね・・・」

「とコナンと哀は事件の余韻に浸つっていたのだが・・・

哀「ところでコナン君？どうして今回は私が探偵役だつたの？あな

たがやつた方がカッコイイのに……」

と哀が詰め寄ると「ナンは頬を紅く染めそれに応える

コナン「哀の凛々しいところが見たかったからに決まってるだろ？いつもの可愛い哀もいいけど、たまには……な？」

そう言つて照れ笑いをするコナンに、哀はもう一つの疑問を投げかける。

哀「助かつたら言つ事聞いてあげるつて言つたじゃない？コナン君は私をどうしたいの……？」

その言葉にコナンの目が光つた！

哀「ちよつ・・・なあに、その顔は！？まさかコナン君・・・やつぱり・・・！？」

なんとも締まらぬ顔でコナンが哀に迫つて来ると哀は後退りしながら頭が混乱してしまつていた・・・

哀「コ・・・コナン君・・・私達、ま・・・まだしょ・・・小学生なのよ！？そんなのま・・・まだ早いわ・・・！」

コナン「良いじゃねえか・・・減るもんじゃなし！…おとなしく言う事聞けって！…！」

コナンが強引にじり寄り、後わずかで哀に密着しようとしたその時、哀は堪え切れなくなり思い切り瞼を閉じてしまった。

コナン「おー覚悟決めたのか？じゃあ遠慮しねーかんな！？」

その言葉に哀はコナンの言う通り覚悟を決めたのだが・・・

次の瞬間、哀は太腿に重みを感じ恐る恐る瞼を開けてみた。

するとそこには満足げに満面の笑みを浮かべるコナンの頭が・・・

哀「（・・・へ？これだけ・・・！？）

哀が呆気に取られていると、コナンが訝しげに顔を見上げてこいつ言った。

コナン「何『鳩が豆鉄砲喰らつた』よつな顔してんだよ？何か今日の哀・・・変だぞ？」

哀は自分のリアクションが恥ずかしくなり、またなぜだか怒りが込み上げてきた・・・

気づくとコナンの類を思い切り抓つてい、コナンの叫びが阿笠邸まで届いていた。

コナン「ギャ～ッ！～！」

阿笠「何やつとるんじゅ・・・あの2人は・・・？」

この吆きがコナンに聞こえたかは定かでないが・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4940e/>

---

FBIから来た女・番外編～650万年前の亡靈の別ルート

2010年11月23日05時28分発行